平成 29 年度 「教育の質向上プロジェクト」 成果報告書

１．取組名称（含副題）	基軸科目「現代に生きる」における授業内外の学修を促す専用ホームページの活用
２．取組学部等名	人間学部
３．取組代表者／取組者	取組代表者　宮嶋秀光 取　組　者　加茂省三、安藤喜代美、西村善矢、加藤昌弘

４．取組の概要

（1）取組の達成すべき目標と、それが大学全体の教育改善に与えると考えられる効果について

人間学部では、平成 27 年度のカリキュラム改訂において、教養教育の導入科目として新入生全員を対象とする基軸科目「現代に生きる」を導入した。この科目は,全学の DP にもあるように、「広い視野に立って物事の公平な判断をする」学生を育て、将来の公正な社会の担い手たる市民を輩出する教育の基盤として位置付けられている。従って、これまで専門の異なる６学部の教員の協力のもと、①現代社会が直面している諸問題の理解とその解決の可能性を探ること、②その過程で小集団およびクラス全体における討議を重視することを二つの基本方針として、平成 26 年度のトライアルも含めれば、3 年間にわたって試行錯誤を重ねてきた。そこで、学生の議論を組織する方法論などについては、一定の成果を得たが、今後は授業内はもとより、特に授業外での積極的な学修を推進することがいっそう重要な課題となりつつある。その課題に応えていく方途や環境を整備することが本事業の目標であるが、それを達成することは、本授業における学生の議論と学修の深まりを促すと同時に、本学で開講されている多様な大規模クラスにおいて、学生の積極的な議論を組織し、自発的な学修を促進することが求められる場合に、一つのモデルとして活用されることが期待される。

（2）取組の実施概要と用いる手法について

本取組では、基軸科目「現代に生きる」専用のホームページを立ち上げ、それを学生の授業内外の主体的な学修の促進、および授業終了後の継続的な学修の促進のための手段、同時にまた本授業の取り組みを学内外に紹介する手段として活用していくことを基本とする。本ホームページに掲載し、閲覧および活用できる内容としては、以下のものを予定している。①授業用の教材・資料・データ等の提供、②授業外のグループ討議で活用可能な追加資料の提示、③授業における討論等の動画記録の提供、④毎回提出されるグループ単位のレポートの一部紹介、⑤レポートに対する教員のコメントの掲載、⑥電子書籍の作成と配布、⑦授業で取り上げた問題に関連する継続的な情報提供、⑦学生と教員が共有できる適切な意見交換の場の提供などである。なお、ホームページの活用も含め、基軸科目の成果を各担当教員が報告する冊子も、学内用に印刷し配布したい。

（3）取組の成果を測定する指標

本事業の成果は、新設のホームページの活用状況（アクセス数、掲載資料数、動画配信数など）によって明確になるが、その利便性等に関しては、毎年 9 月に全受講生を対象に実施するアンケート調査によっても確認したい。

５．実施計画（期日と計画内容を箇条書きで示すこと）

基軸科目「現代に生きる」は、授業全体の統一テーマを「人口問題を考える」とした上で、サブテーマに沿った４ないし５回の授業からなる３つのユニットを作り、それぞれのユニットの担当教員がチームで運営する方式をとってきた。4 月当初は、班の編制、班の討論の仕方、毎時限レポートの提出方法など、まず新入生が慣れる必要のある事項が多いため、これまで、各班１つの iPad の導入や、授業後の WebClass の活用など、新しい試みは４月当初は避け、

学生自身も授業に慣れ始めるユニット２以降で導入することにしてきた。今回も、ユニット１の過程でホームページの構築を業者委託で完成させ、5 月下旬に始まるユニット 2 以降に運用を始めていきたい。従って、以下のような日程で本事業を進めていきたい。

（尚、「６．取組の実績」の記述のために、取組内容について申請書にはなかった番号を付している。）

４月　基軸科目開講（ユニット１開始）

①－１　業者委託によるホームページの作成

②　授業の動画記録の作成開始

5 月下旬（ユニット 2 開始）

③－１　ホームページの活用に関する学生へのオリエンテーション

①－２　授業用資料、授業後の参考資料、レポート、教員のコメント等の掲載開始

６月下旬（ユニット３開始）

③ホームページの他の機能に関するオリエンテーション

①－３　ホームページの全面運用開始

７月末

①－４　個人レポートに関する教員のコメントの掲載

９月下旬

④－１　授業アンケートの実施と集計・分析

１０月下旬

④－２　授業アンケートの結果を掲載

①－５以降、担当教員から関連するトピックス等に関して情報提供

１２月上旬

⑤－１　当該年度の成果を総括する電子書籍の作成と配信

⑤－２　学内向け実践報告冊子の印刷と配布

６．取組の実績

①ホームページの作成に関しては、授業外における学修を促すことを最大の目的としているため、５月の授業（「ユニット２」）の後半から、ウェブ上で学生が互いに議論し、また共同のレポート作成のために意見・情報を交換することを目的とする専用ページ「現代に生きるトーク」の作成と運用に着手した。全体で４０にのぼる班ごとの運用を可能にするために、試験的な運用を経て、６月の授業（「ユニット３」）以降、「現代に生きるトーク」を班ごとの共同レポートの作成に活用できる環境を整備した。

それ以外のホームページの内容については、順次整備していったが、テスト版全体の完成が１２月中旬までかかったため、①－２，４、５に関しては、授業期間中の運用は間に合わなかった。なお、テスト版のチェックが終わったため、学内向けの部分を除き、ホームページ全体を１月３１日から一般公開する予定である。

②授業の動画記録に関しては、カメラ等を整備して以降、毎回、記録を残している。その一部は、すでにテスト版のホームページにも掲載されており、また FD 学習会やオープンキャンパス等の広報的な機会があるたびに、基軸科目「現代に生きる」の紹介として十分に活用している。

③ホームページの活用に関する学生向けオリエンテーションについては、すでに班単位で活用している iPad の使用法が定着した５月以降の授業の中で、「現代に生きるトーク」の概要と活用法、また iPad との連動した活用法などを説明するとともに、簡単な操作を実際に実行させて定着をはかった。

④独自の学生アンケートは、すでに毎年、後期の必修科目の冒頭で実施してきているが、本年度は、昨年度までのアンケート内容の一部を変更し、特に「現代に生きるトーク」の活用状況や利便性に関して設問を設け、その結果を検討した。なお、アンケート結果の分析に関しては、過去２年の結果と合わせて本プロジェクトの資金で刊行する冊子で報告する予定である。
⑤基軸科目「現代に生きる」の５年間にわたる実践を学内に紹介する冊子の刊行については、現時点で編集作業を進めているところであるが、本プロジェクトの実施者はもとより、「現代に生きる」に参与している他学部の教員３名からも、授業実践の概要と成果に関する報告を投稿してもらえる予定であり、これまで FD 学習会等で紹介してきた内容を含めて、「現代に生きる」の取り組みの全貌を学内に紹介することが期待できる。

７．具体的な成果（所属部局への教育改革の影響・学生の評価を含めて）

①基軸科目「現代に生きる」の取り組みは、学部内で新入生全員を対象にした他の必修科目「人間学総論」の授業構想の見直しや改善に一定の影響を与えており、従ってまた、同数の受講者を対象にする「人間学総論」でも、本プロジェクトで整備した情報機器等の活用が大いに期待できる。
②本プロジェクトで開設したホームページ、特にその中でも学生用に新設された「現代に生きるトーク」は、機能的には従来の WebClass の掲示板の機能を大きく上回っており、各班の学生間や、学生と教師の議論のやりとり、授業時の iPad の記録やレポートの原稿の掲載等も可能にするものであり、授業終了時からレポートの作成時まで活用されることが期待された。しかし、学生アンケートによると、本格運用された授業回（ユニット３）が少なくとも４回はあったにもかかわらず、実際に活用したのはアンケートに回答した学生の 20%弱にとどまっており、本格運用の期間が短かったことを考慮しても、十分な活用とはとうてい言えない状態であり、この点が次年度以降の最大の課題である。
③今年度に実施した学生アンケートには、新設した「現代に生きるトーク」の活用に関する質問項目を設定して、本プロジェクトの成果を確認する意図が含まれていた。その結果、②で既述したように、その活用の程度はまだ不十分であることが明らかになった。その原因として、アンケートから読み取れるのは、「現代に生きるトーク」の使いにくさ（回答者の 17%）というよりも、「現代に生きるトーク」が手軽さという点で、LINE を上回れなかったことに求めることができる。実際、授業外で班の話し合いが持てないときには、LINE を利用したという回答が圧倒的に多かった。但し、後述するように、この問題は情報手段としての不備や優劣の問題というよりも、むしろ授業やレポート課題のあり方の再検討を促すものでる。

８．平成 30 年度以降の取組の展開

今年度、本プロジェクトによって整備されたホームページを存分に使って、基軸科目「現代に生きる」の授業外の学修を促すとともに、受講生への資料提供や学内外への広報を本格的に展開することであったが、特に上の「７．具体的な成果」の③に書いた通り、「現代に生きるトーク」の十分な活用を定着させることが大きな課題として残った。確かに手軽さという点で LINE を上回ることはできないが、元来、「現代に生きるトーク」は簡単な情報や短文のやりとりではなく、授業時に iPad で作成した文章やレポート原稿そのものをアップし，それに関する学生間のいっそう踏み込んだ議論のやりとりを可能にすることを狙いとしている。従って、その使用に学生が慣れるような工夫をすることも必要であるが、授業外で詳しい議論が必要になるような課題の設定や提示の仕方が何よりも問われているとみなすべきである。情報手段としての利便性を活かしながら、授業外の学生の充実した共同学修を促すような授業の展開や課題提示の仕方そのものを工夫していくことが、30 年度の取り組みとして不可欠になっている。

９．本取組を今後、他学部等が採用した際に見込まれるメリット

本プロジェクトは、学生間の討議や共同的な課題への取り組みが求められるような授業であるにもかかわらず、学生が共通の学修時間を設けにくいケースに応用することが可能である。基軸科目「現代に生きる」でも、比較的に学生の条件が一致し、学内で頻繁に集まることができる班は、「現代に生きるトーク」はほとんど不要であったようである。しかし、学生の時間割上の制約や、特に課外活動に参加している学生のことを考慮すれば、こうした補助手段は、授業外の共同学修を補助できる有効な手段になると思われる。もちろん、実際に顔をつきあわせて議論をすることに超したことはないが、PBL 学修のように共同学修の継続が不可欠であるにもかかわらず、その条件が整えることが難しい授業のケースでは、受講者数の大小や専門分野の相違を超えて、本プロジェクトが作成した「現代に生きるトーク」は汎用性が高いと思われる。

１０．その他の特記事項

本プロジェクトを進めるにあたり、４０台以上の iPad の同時運用や、多数の学生のネットへの同時接続の必要性など、キャンパスの ICT 環境の充実が重要な前提になっていた。この点では，ドーム前キャンパスの環境は整えられているといえるが、実際に授業を実施する上で、不都合が生ずるケースも幾つかあった。今後は、授業の実際を踏まえた ICT 環境全体の柔軟な整備や専門家の支援等がいっそう重要になると思われる。